

版画脳で人とつながる

Artist

萩原 沙織 HAGIWARA Saori
博士前期課程芸術専攻
洋画領域 2年

Writer

古谷 美也子 FURUYA Miyako
芸術専門学群
芸術学専攻 2年

つくばアートフィールド

筑波大学と大学院で版画を専攻する学生の作品発表の場である「6A105展」。ひとくちに版画といっても技法、素材など様々で、それぞれに独特の印象がある。中でも今回注目したのは《群青》というタイトルで、水彩画にも、コラージュにも見える作品。版画って何だかとても奥が深そう。そこで制作者の萩原沙織さんにお話を伺うことにした。

—早速ですが、この作品のテーマと技法について教えてください。

萩原 テーマは子供です。子供の顔や、何人かで遊んでいる様子をモチーフにして、5枚の連作にしました。すべて青系の色で統一しています。技法としては、まず画用紙に水彩絵具で描いたものを和紙に転写して滲ませます。デカルコマニーの技法ともいえますね。次にその和紙を画面にコラージュのように何枚も重ねて貼りながらモチーフ



萩原沙織《群青》2013年、モノタイプ、44×36cm

を表現しています。だからこれ結構重いです。はっきりした輪郭は出さないので、滲みの特徴を生かしてぼんやりと見えるようにしました。

—なるほど。その「滲み」が、柔らかく、穏やかな雰囲気を出しているのですね。何だかずっと見ていたい作品です。これも版画の技法の一つなのですか？

萩原 正確には版画とは言えないかもしれないですね。絵具を紙に転写する、ということで版画に入るかなと考えました。今、週一回保育園で美術指導をしていますが、そこでの子供たちとの関わり合いの中からこの技法のアイデアをもらいました。テーマも、保育園の子供たちです。実はずっと木版画の作品を作っていたのですが、黒いインクだけだったので、その反動(笑)で今回は色を使う方法で制作してみました。でも、版画って結構応用範囲が広いんです。紙に刷るだけでなく布に刷ったり、コラージュもできるし、いくつかの版画の技法を組み合わせることもできるので、アイデア次第でいろいろと工夫が出来ます。

—版画って奥が深そうですね。ところで、萩原さんはどうして大学で美術を学ぼうと思ったのですか？

萩原 子供の頃、両親の仕事の関係で紙やテープやホチキスなどの事務用品が身近にあったんです。それを使っていつも一人で、工作をしたり、絵を描いたりして遊んでいました。小学生になると漫画に夢中になって、自分でもよく描いていましたね。将来は漫画家かイラストレーターになりたいと思っていました。それが、高校の美術部で油絵を描き始めて、

大学でも本格的に勉強してみたいと思うようになり、美術系予備校にも通いました。

—それでは、版画を始めたきっかけは？

萩原 大学に入学した時は、油絵を専攻しようと思っていました。でも、授業で版画を制作して興味を持って、3年生から版画を専攻しました。はじめは銅版画とかをやっていたんですけど、ちょうどイタリア留学から帰ってきた先輩がいらっちゃって、作品や人柄にすごく影響を受けたんです。その先輩が木版画だったので、私も木版画(笑)と思ってやってみたら、すごく自分に合っている気がして、版木を彫ることが結構楽しかったんです。それ以来ずっと木版画中心で制作しています。

—萩原さんにとって版画の魅力ってどんなところですか？

萩原 例えば油絵は、「足していく」感覚で制作するものだと思うんです。デッサンが大まかでも、絵具をのせながらイメージを固めていったり、途中で変更することも可能です。消したり、描いたり、修正もできる。それに対して版画は、初めに仕上がりの状態を完全に想定しないと、彫りとか刷りなどの工程が決まらない。使う色の数によって、いくつの版が必要なのか、刷った時に色がつく所とつかない所をよく計算しなきゃいけないし、しかも技法によってはその画面を反転させて考えなければならない。つまり、終わりがあって始まる、とも言えます。私はそれを「版画脳」って呼んでいます。経験すればするほどその脳は育つんだと思います。

—「版画脳」とはおもしろいですね。その版画脳のおかげで思った通りの作品ができるんですね？

萩原 それが、やっぱりできないんです。どんなに計算した工程を重ねて刷りまで行ったとしても、実際に刷り上がってみると、やっぱりイメージ通りにはならない。思った以上の出来の時もあるかと思えば、そうでない時もある。でも、そのハプニング的な所も版画の魅力ですね。もう一つ、版画の工程では、版、インク、紙、そして刷るためのいろいろな道具があって、それらに触れたり、使ったりするのも楽しいです。多分子供の頃に工作で遊んでいた影響かもしれません。それで、絵を描くだけではなく、工程を考えたり、道具を使って制作したりするのが楽しいんだと思います。

—制作している時はどんな事を考えているのですか？

萩原 版木を彫っている時が一番リラックスしているかな。音楽を聴いたり、映画を見たりしながら、一日中彫っている時もあります。そんな時は特に何も考えてはいませんね。「摺り」の時は結構緊張しているし。一番苦しいのはテーマやモチーフを決める時ですね。

—作品を創作する時の好きなテーマやモチーフはありますか？

萩原 植物や動物などを絡ませるような装飾的なモチーフが好きです。それを額縁のように構成して、鏡に見立てるんです。作品を見る人が、自分自身を見るこ

とができる鏡です。鏡とかのフィルターを通して見ることで、客観的に自分を見つめ直す事ができる。それも私がよく用いるテーマです。「人」に興味があるんです。それで版画だけではなく、カリカチュアも好きでよく描いています。

—カリカチュアとは具体的にどんなものですか？

萩原 新聞とかによく載せられているのは、有名人の顔の特徴を誇張して少し風刺したのですが、私が描きたいのは相手の外観の特徴だけでなく、人柄や、大げさですが人生までも表現したカリカチュアです。一人の人のカリカチュアを描く時、私はその人のそれまでの人生のドラマを想像してしまうんです。そして、私が描いたものをその人が見た時、その人を知っている第三者がそれを見た時、一枚のカリカチュアを通してそこにコミュニケーションが生まれる、それがとても面白いと思いました。大学の卒業論文もカリカチュアについてでしたし、一時はプロになる事も考えました。

—それが、大学院に進学しようと思ったのはどうしてですか？

萩原 大学で学んだ絵画や版画の技術を社会にどう役立てるか、それを見つけるために大学院に進学することにしました。大学では制作中心でしたので、もっと視野を広げたいと思ったんです。そんな時、筑波大学附属小学校での授業を見学した事が、大きな刺激になりました。保育園での美術指導のお仕事を紹介して

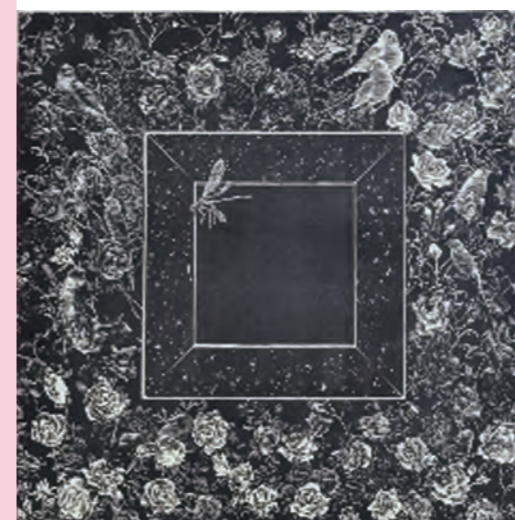
いただき、教える事の楽しさも知る事が出来ました。それまでは大学や大学院で学んだことを生かした仕事をしたいと漠然と考えていただけでしたが、教師という職業に自分がやりたかった事が全部凝縮していると思ったんです。それからは、大学の時に中途半端だった教職課程も全部単位を取得して、将来は美術教師になろうと目標を決めました。

—教えることの楽しさって何だと思えますか？

萩原 附属小の図工の授業を見学した時、学校での美術の授業に対する概念が大きく変わったんです。それまでは作品の仕上がりの良し悪しが評価の基準だと思っていたんですが、そこでは結果ではなくそこまでの過程をととても大切にしていました。手を動かして、素材に触れたり、道具を使ったりする楽しみ。友達との道具の貸し借りや会話などで生まれるコミュニケーション。美術を通して自分が味わったこの楽しさを子供たちにも味わってもらおう事、それがまさに自分のやりたかった事でした。

—将来の夢に向かって、自分の経験や学んだことを生かしながら、制作の過程や、そこから生まれる人とのつながりを大切にしようとする萩原さん。それを考えるのもきっと「版画脳」なのですね。今後の活躍に期待しています。本日はありがとうございました。

つくばアートフィールド



萩原沙織《theater I》2013年、木版・和紙、91.5×91cm



萩原沙織《ジョンとポール》2012年、photoshop、29.7×21cm



萩原沙織《theater II》2013年、木版・和紙、91.5×91cm